須恵器出土の木棺直葬墳

—京都府北部における須恵器出土状況の検討—

石　崎　善　久

1　はじめに

丹後半島では、古墳時代前期以来、大型前方後円墳が相次いで築造される。しかし、中期に入ると大型古墳は姿を消し、京都府北部の古墳文化は由良川水系を中心に展開するものと考えられる。中期以降の丹後では有力な首長墓の存在を提示することができず、中期から後期にいたるまで前方後円墳を築造する北丹波とは好対照をなすといえよう。このように、丹後は首長墓の動向や地理的な状況を加味しても丹波と切り離して考えることが可能であり、一定地域としてまとまりをもっていたものと考えうる。

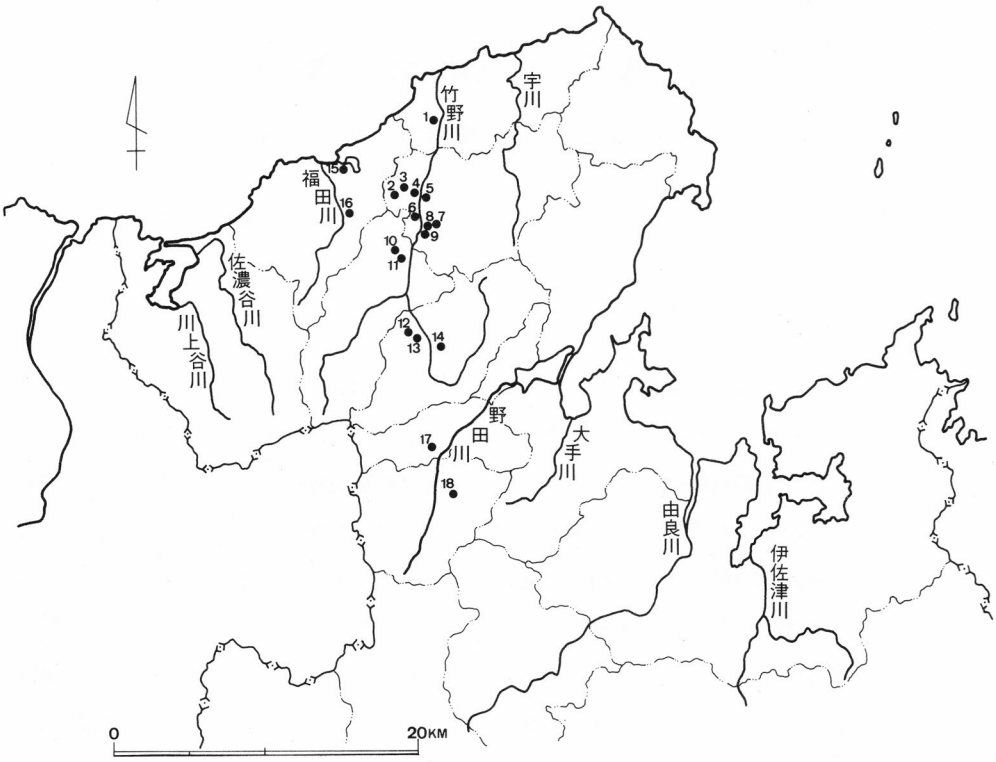
近年、日本各地で横穴式石室を内部構造にもつ後期群集墳に先行して形成される古墳群の調査が増加しつつある。これらは、初期群集墳あるいはプレ群集墳と呼ばれ古墳時代前期から後期初頭にかけての古墳時代社会を復元する格好の資料として脚光を浴びつつある。丹後半島でも、近年の大規模な造成に伴う調査により、こうした初期群集墳の調査例は増加しており、群構造・墳丘築成法・出土遺物など、古墳時代社会を復元するに必要な資料が蓄積されつつある。そこで、小稿では初期群集墳出土遺物のひとつである須恵器に焦点を当て考察を試みたい。なお、地域設定として丹後半島で最も古墳の調査例の多い竹野川流域を中心に必要に応じ他地域の例を参考にあげたい。

2　須恵器出土の木棺直葬墳

調査により須恵器の出土をみた木棺直葬墳は第1図に示すとおりである。分布状況をみると、竹野川流域にその大部分が集中するが、これは調査例が多いためであり、あくまで参考資料として提示した。ここでは古墳、あるいは古墳群について下流域より概観する。なお、各古墳における須恵器の出土状況・器種構成は第1表に示すとおりである。

西小田古墳群[1]　竹野川西岸に位置し総数5基からなる。うち、先端に位置する4・5号墳の2基が調査され、両者から須恵器の出土をみた。いずれも1墳1葬。未調査の古墳については詳細不明である。

遠所古墳群[2]　竹野川西岸に位置し総数24基からなる。現在も調査中のため、報告はなさ



第1図　須恵器出土古墳分布図

1．西小田古墳群　2．遠所古墳群　3．宮の森古墳群　4．坂野古墳群
5．奈具岡遺跡　6．太田古墳群　7．新ヶ尾東古墳群　8．スクモ塚古墳群
9．桃山古墳群　10．大耳尾古墳群　11．八幡山古墳群　12．池田古墳群
13．小池古墳群　14．帯城古墳群　15．岡3号墳(石棺)　16．勝山古墳(石棺)
17．屋敷ノ内古墳群　18．鳴谷東1号墳

れていないがTK47型式からの須恵器が出土している。また、群中には木棺直葬墳のみでなく竪穴系横口式石室の影響下に成立した石室が混在することが注意される。

坂野古墳群[3]　竹野川西岸に位置し、総数4基からなる。4号墳は他の古墳とは立地が異なり、単独で位置する。3基の主体部が確認されている。

奈具岡遺跡[4]　竹野川東岸に位置する。弥生から古墳時代にかけての複合遺跡である。低丘陵上に古墳時代の土坑墓群が位置し、やや距離を置いて南尾根古墳が位置する。

太田古墳群　竹野川西岸に位置し、総数32基から構成される。2号墳[5]は径30mの埴輪列を有する円墳であり、6世紀前半の築造。当該期の古墳のなかでは大型に属する。計4基の主体部が確認され、鉄鏃・刀・玉類が出土している。4号墳[6]は径16mを測る円墳で、2号墳とほぼ同時期の築造であり、3基の主体部が確認されている。また、2号墳に先行する1号墳が方墳であることは注意される。隣接する大田南古墳群や下後古墳群は2・4号

第1表　竹野川流域須恵器出土古墳一覧表

	No	古墳名	墳丘	棺外出土土器				棺内出土土器			備考
				墳丘	墓壙上	墓壙内（棺上）	その他	棺木口（副室）	転用枕	その他	
TK208	1	西小田5号墳	■地 11				甕2（ピット）				剣・滑石製勾玉
	13	小池2号墳	■盛 10		甕1		甕（ピット）				
	13	小池7号墳	●盛 8				甕1 土師甕1（周溝）				土坑墓か？ 赤色顔料
TK23	13	小池5号墳	●盛 9	土師杯1	杯蓋2 杯身2						主体部は掘り方をもたない（？）
	13	小池10号墳	■盛 6	土師杯 土師甕	甕1（片）						
	5	奈具岡南尾根	○盛 —				杯蓋1 土師杯2（周溝）				主体部削平
	5	奈具岡S11土坑	—		無蓋高杯1 杯蓋2 杯身2（土坑肩部）						土坑墓
TK47	12	池田1号墳	●盛 10	高杯蓋1 高杯1 杯身1 土師高杯1 ほか	土師甕1						
MT15	13	小池11号墳	●盛 8	杯蓋1（片） 杯身1（片）							鉄鏃2・刀子1
	8	スクモ塚29号墳第1主体部	○？						杯蓋1 杯身1		
	13	池田3号墳第2主体部	●盛 10			短頸壺1 同蓋1 有蓋高杯1（壇状施設）			杯蓋1 杯身1		墳丘大部分削平 鉄鏃14・刀子2 直刀1
	7	新ヶ尾東9号墳第1主体部	●盛 11		杯蓋1 杯身1						鉄鏃
	7	新ヶ尾東9号墳第2主体部							杯蓋1 杯身1		刀子
	9	桃山1号墳第1主体部	●盛 19	杯蓋3、杯身3、甕1 短頸壺2、高杯2 甕1、子持ち壺？ほか				杯蓋4 杯身2 高杯1 甕1			馬具（轡・留金具） 鉄鏃30・刀子5 玉類
	6	太田4号墳第2主体部	●盛 16			杯蓋2 杯身2					鉄鏃・刀子1 針状鉄製品
	6	太田2号墳第1主体部	●盛 34	脚付子持壺 器台		蓋・高杯・甕・壺・甕 提瓶・横瓶 脚付短頸壺			杯蓋1 杯身1		円筒埴輪列 刀・玉類
	4	坂野4号墳第1主体部	●盛 15		甕1	杯蓋1 高杯蓋1			杯蓋1 杯身1		
TK10	6	太田4号墳第1主体部			杯蓋1 甕1・甕2 広口壺1 短頸壺1	杯蓋2 杯身2 短頸壺蓋1 甕1			杯蓋1 杯身1		鉄鏃 刀子 赤色顔料
	9	桃山1号墳第2主体部							杯蓋2 杯身2		鉄鏃3・刀1
	4	坂野4号墳第2主体部			短頸壺1				杯蓋1 杯身1		
	4	坂野4号墳第3主体部			甕1				杯蓋1 杯身1		
TK209	1	西小田4号墳			杯身1						

墳に先行して造墓が開始されている。

新ケ尾東古墳群[7]　竹野川東岸に位置し、総数12基から構成される。8～10号墳の3基が調査され、8・9号墳は複数の埋葬施設を持つ木棺直葬墳、10号墳は竪穴系横口式石室であることが確認された。

スクモ塚古墳群[8]　桃山古墳群に近接する。総数31基中2基が調査されている。29号墳は2基の主体部をもち中心主体である第1主体部は土師器高杯を用いた転用枕が検出されている。須恵器は後続する第2主体部より転用枕として検出されている。なお隣接する28号墳は竪穴系横口式石室と考えられ、木棺直葬墳から石室への移行が想定されている。

桃山古墳群[9]　竹野川東岸に位置する。2基から構成され、両者から須恵器の出土をみた。1号墳は径20mを測る円墳であり、当該期の古墳としては大型に属する。2基の主体部が確認されているが、古墳築造の契機となった第1主体部からは馬具をはじめとする豊富な遺物が出土している。1号墳第1主体部に後続する第2主体部や2号墳は規模・内容等1号墳第1主体部に比してかなり貧弱といえよう。

池田古墳群[10]　竹野川中流域西岸に位置する。総数3基からなり比較的散漫な分布状況を示す。1・3号墳から須恵器の出土をみた。1号墳は1墳1葬。3号墳は2基の埋葬施設をもつ。

小池古墳群[11]　竹野川上流域西岸に位置し、総数約60基からなる。10基が調査され、6基から須恵器の出土をみている。須恵器はTK208併行期のものから認められるが、先行する古墳が存在することが注意される。先行する古墳と副葬品などの点で大きな格差は認められないが、須恵器出土古墳はいずれも1墳1葬であるのに対し、先行する古墳には複数の主体部を持つものがある点は注意される。

以上、竹野川流域における須恵器出土の古墳（古墳群）について概観した。

次に須恵器の出土状況・器種構成について整理を試みたい。

3　出土状況・器種構成の変遷

須恵器の出土状況および器種構成については第1表に示すとおりであるが、その出土状況によって埋葬過程における須恵器供献(もしくは副葬)の行われた段階を考えることができる。以下、簡単にまとめておく。

第1段階：古墳築造時に使用されたもの。盛り土下の旧表土もしくは地山上からの出土により判断可能である。ただし、下層遺構を破壊している可能性も十分考えられるため断定するにはかなりの検討を必要とする。

第2段階：被葬者埋葬時に被葬者とともに納められたものである。棺内からの出土であ

り、転用枕・副葬品と考えられる。

第3段階：棺蓋を施したのち、墓壙を埋め戻すまでの段階に供献もしくは副葬されたもの。棺上に置かれたとものと墓壙を埋め戻す過程のなかで置かれたものとに分けられるが、現実にはこの両者を識別することは非常に困難であり、同一段階として考える。

第4段階：墓壙埋め戻し後に供献されたもの、墓壙上に並べられた状態や墓壙を切って掘り込んだピット内に埋納した例などがある。ただし、墓壙埋め戻し後に墳丘に盛り土を施さない場合は第5段階と同様、埋葬最終段階での使用が考えられる。

第5段階：埋葬終了後に墳丘を構築し、墳丘上に供献したもの。古墳における葬送儀礼の最終段階での使用と考える。墳丘の削平・流出などにより墳丘流土からの出土として認められるものが多いが、埋葬終了後のものとみて良いであろう。

この他に周溝からの出土例があるが、これも第5段階のものと考えていいであろう。

さて、以上の点をふまえて、須恵器の出土状況および器種構成について時期にそって概観していきたい。

現在のところ、丹後半島で確認しうる最古型式の須恵器は加悦町鴨谷東1号墳[12]出土の脚付き短頸壺である。TK73～TK216併行期の資料と考えられるが、古墳自体盗掘を受けているため、本来どの位置にあったのか推定することは不可能である。ただし、鴨谷東1号墳は加悦谷の古墳時代中期を代表する首長墓であり、こうした大型墳から古式須恵器が出土した意義は大きいものと考えられよう。

TK208併行期には小古墳からの出土例として小池2・7号墳、西小田5号墳からの出土例が認められる。西小田5号墳・小池2号墳については、墓壙埋め戻し後に穿たれたピット内の埋納であり、以後の古墳にはみられない特異な状況を示す。小池7号墳は周溝内の出土であるが3古墳とも埋葬終了後の第4・5段階に須恵器を供献するという共通性を持つ。また、器種構成についても𤮔が必ず認められ、極めて高い共通性を有していたものと考えられる。また、この時期にすでに墓壙上への供献が行われていたことは注意しておく必要があろう。

TK23併行期には、小池5・10号墳、奈具岡南尾根古墳、奈具岡S11土坑があげられる。TK208併行期にみられたピット内への供献はない。TK23併行期においては小池5・10号墳では墓壙上からの出土であり、墳丘から土師器しか出土していない点を考慮すると小池古墳群では須恵器と土師器を使い分けていた可能性が考えられる。奈具岡南尾根古墳では周溝からの出土であるが古墳自体大規模な削平を受けており詳細は不明。奈具岡S11土坑は土壙墓からの出土であり、木棺直葬墳と区別して考える必要があるが、墓壙埋土上からも検出されており、埋葬終了後に供献されたものと考えられる。以上TK23併行期には第

４段階での供献が普遍的なものであり、須恵器祭祀の定型化を認めることができる。器種はTK208併行期では必ず認められた𤮔が減少し、かわって蓋杯が多く認められる。また、新たな器種として高杯が出現するが、個々の古墳においてその様相にはかなりの差が認められる。以上、TK23併行期においては前段階の伝統のもとに第４段階での供献という強い共通性を持ちながらも、使用する器種に多様性が認められる。

TK47併行期の資料は非常に少なく、現在では池田１号墳の１資料を例示しうるにすぎない。ただし、現在調査中の弥栄町遠所古墳群、峰山町大耳尾古墳群[13]から同併行期の資料が出土しており、今後この時期を考察するに足る資料が得られるものと考えられる。池田１号墳では、須恵器は墳丘よりの出土であり、墓壙上には須恵器ではなく土師器甕が供献されている。須恵器・土師器を含めた土器の供献が第４・５段階にあることは前段階と同様であり、TK23併行期にみられた器種の多様化と関連するものかもしれない。

MT15併行期の調査例は各時期を通じてもっとも多い。これは、調査の偏りというよりも、この時期における須恵器の普及と密接な関わりを持つものと考えたい。その裏付けとしてこの時期から集落遺跡からの出土量が増加することをあげることができる。

同併行期須恵器出土古墳として小池11号墳、スクモ塚29号墳第１主体部、池田３号墳第２主体部、新ケ尾東９号墳第１・第２主体部、桃山１号墳第１主体部、太田４号墳第２主体部、太田２号墳第１主体部・坂野４号墳第１主体部などがあげられる。前代からの第４・５段階における供献の他に第１・２段階での須恵器の供献・副葬がみられる点がこの時期のもっとも大きな特色である。また、第１段階で埋納される須恵器は副葬品としての他に転用枕として利用される例が多いことに留意しておく必要がある。器種は蓋杯を基本とするが、桃山１号墳・太田２号墳のような中規模古墳においては豊富な器種が出土しており、被葬者の階層的格差に起因するものと考えることも可能である。

TK10併行期の資料も少なく、また、新たに築造される古墳数も減少するが、これは横穴式石室の普及との関連で捉えることが可能であろう。同併行期を前後して丹後半島各地で竪穴系横口式石室が散発的に構築される。調査例として、加悦町入谷A１号墳[14]、宮津市霧ケ鼻５・６号墳[15]、久美浜町陵神社12号墳[16]などがあげられる。また、時期は下がるものの先にみた遠所古墳群、スクモ塚古墳群、新ケ尾東古墳群などはTK43併行期には石室へ移行したものとみられ、この時期を木棺直葬墳の衰退期とみてよいと考える。

この時期では、太田４号墳第１主体部、桃山１号墳第２主体部、坂野４号墳第２・３主体部をあげられるが、太田４号墳・坂野４号墳第３主体部では第２段階(転用枕)～第４段階で、坂野４号墳第２主体部では第２・４段階の各段階で須恵器使用がみられるのに対し、桃山１号墳第２主体部では第２段階(転用枕)での使用が認められるのみである。このよう

な格差についてその背景を考察する材料はないが、普遍的な要素として第2段階での転用枕としての埋納があることは指摘できる。

TK43併行期以降の時期ではほとんど資料がなく、TK209併行期の西小田4号墳での墓壙上への供献例をあげうるのみである。

4　ま　と　め

以上、須恵器の出土状況について、埋葬の各段階・器種構成について概観してきた。その結果、古墳の埋葬における須恵器の取り扱いについて以下のようにまとめることができるものと考えられる。

第Ⅰ期(TK208)　丹後半島で須恵器が古墳において用いられはじめる時期である。ただし、加悦町鴨谷東1号墳のように大型首長墓にはそれ以前に導入されていた可能性は十分考えられ、今後の調査に期待するところが大きい。小古墳においては器種構成・埋納の段階・方法などに共通性が認められ、ある程度定型化した形で古墳祭祀に須恵器が導入されたものと考えられる。

第Ⅱ期(TK23～47)　定型化した形で導入された須恵器の用いかたが変容しはじめる段階である。ただし、埋納段階は前期の伝統を引く第4・5段階であり、器種の多様化という点のみでの変容である。

第Ⅲ期(MT15～TK10)　在地内での須恵器祭祀の定型化を迎える段階とみられる。なかでも、地域的特色として第2段階で転用枕としての使用法が定着化する点は丹後を含めた山陰地域での大きな特色といえよう。また、当該期は、副葬品として鉄製利器・工具などの出土量の増加、1墳複数埋葬の普遍化など他の面においても大きな画期と認められる時期であり、今後このような現象面を詳細に検討する必要がある。

今回は、初期群集墳出土遺物のひとつである須恵器を俎上にあげ、簡単ではあるが出土状況などについて整理を試みた。今後、初期群集墳を考察するにあたっては副葬品・墳丘・内部構造・群構造などについて詳細な整理・検討を行い、これらを総合的に考えていくことが必要であると思われる。なお、今回は触れることができなかったが、隣接する丹波・但馬地域や畿内中枢部でも同様の整理を今後行い、比較・検討していきたいと思う。

(いしざき・よしひさ＝当センター)

1　三好博喜「西小田古墳群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

2　当センター主任調査員増田孝彦氏のご教示による。

3　中谷雅治・杉原和雄「坂野」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第2集　弥栄町教育委員会)　1979
4　川西宏幸ほか『京都府弥栄町　奈具岡遺跡発掘調査報告書』　財団法人古代学協会　1986
5　堤圭三郎「太田古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1970)』　京都府教育委員会)　1970
杉原和雄「丹後地方の横穴式石室採用以前の須恵器資料」(小江慶雄先生還暦記念論集『水と土の考古学』　考友会)　1973
6　増田孝彦・石崎善久「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成元年度発掘調査概要(1)太田・下後古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第39冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1990
7　増田孝彦「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度(3)新ケ尾東古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1988
8　三好博喜「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡(2)桃山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987
9　岡田晃治「国営農地開発事業関係遺跡〔2〕スクモ塚古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1988)』京都府教育委員会)　1988
10　肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡〔2〕池田古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1990)』京都府教育委員会)　1990
11　鈴木忠司・植山茂ほか「京都府中郡大宮町　小池古墳群」(『大宮町文化財調査報告』第3集　京都府大宮町教育委員会・(財)古代学協会・平安博物館)　1985
12　和田晴吾ほか「鳴谷東1号墳第2次発掘調査概報」(『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』第2冊　立命館大学文学部)　1989
13　峰山町教育委員会安田章氏のご教示による。なお、遺物の一部については実見の機会を得た。
14　佐藤晃一「入谷西A-1号墳―調査の概要―」(『加悦町文化財調査概要』2　加悦町教育委員会)　1983
15　「霞ケ鼻古墳群現地説明会資料」(宮津市教育委員会)　1990
16　「陵神社古墳群現地説明会資料」(久美浜町教育委員会)　1990